

氏名	呉 揚
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5636 号
学位授与の日付	平成 29 年 9 月 29 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	日本語動詞の時間的限定性とアスペクト・テンス形式 —運動を表さない動詞を中心に—
学位論文審査委員	教授 宮崎 和人 准教授 片桐 真澄 准教授 堤 良一 教授 栗林 裕 大阪大学理事・副学長 工藤 眞由美

## 学位論文内容の要旨

### 1. 目的

本研究の目的は、「時間的限定性」の観点から取り出される述語の意味的なタイプである〈状態〉〈特性〉〈空間的配置〉を表す日本語動詞を対象として、それらの語彙的な特徴およびアスペクト・テンス形式の意味・機能という文法的な側面を明らかにすることを通して、従来の動詞研究において手薄であった非典型的な動詞を含めた、日本語動詞の全体像の解明を目指すことである。

### 2. 序論

日本語動詞の研究史を見ると、〈運動〉を表す典型的な動詞のムード・テンス・アスペクト体系はすでに明らかにされているが、〈運動〉を表さない非典型的な動詞については、語彙的な面でも文法的な面でも、まだ十分に体系的な考察がなされていない。日本語動詞論の完成には、これらの非典型的な動詞についての語彙・文法的な研究が不可欠である。

〈運動〉を表さない非典型的な動詞にアプローチするには、まず、動詞の意味のタイプ化が必要である。そのタイプ化の作業には、「時間的限定性」の観点が有効である。「時間的限定性」は、現実世界の出来事の捉え方に関わって、アスペクト・テンス・ムード体系の分化の土台となる。時間的限定性のある現象であっても、動的な現象である〈運動〉を表す動詞には典型的なアスペクト・

テンス対立が成り立つが、静的な現象である〈状態〉を表す動詞では、アスペクトの対立が変容する。さらに、時間的限定性のない〈特性〉〈関係〉を表す動詞になると、アスペクト・テンス形式は時間的意味を表さなくなり、アスペクト・テンス対立から解放される。そのため、アスペクト・テンス形式に固定化が起こり、ある場合には別の目的によって再利用される。本論文では、アスペクト・テンス対立の変容やアスペクト・テンス形式の再利用に関する言語事実を精密に記述する。

### 3. 本論

本論では、時間的限定性の観点から動詞の意味的なタイプを概観したうえで、〈運動〉を表さない非典型的な動詞の中から、〈状態〉(「痛む」など)、〈特性〉(「優れている」など)、〈空間的配置〉(「そびえる」など)といった意味的なタイプに属する動詞を対象として考察する。これらの動詞の語彙の外延や下位分類について検討したうえで、これらのアスペクト・テンス形式の分布や意味・機能について、大規模な実例調査に基づいて、実際の言語活動(必要に応じて、会話文に限定したり、テキストタイプを区別したりする)の中にある言語事実を記述する。

最初に取り上げるのは、状態動詞である。述語の意味的なタイプとしての〈状態〉については、研究者によって捉え方がかなり異なるので、まずは、日本語動詞の体系的な研究にとって望ましい〈状態〉の規定を慎重に検討する。その上で、状態動詞の中心を占める、感情・感覚・知覚を表す動詞を取り上げ、それらのムード・テンス・アスペクト体系を記述する。これらの動詞が典型的な運動動詞と異なるのは、人間の内面的な現象という語彙的な意味に起因し、人称性と相関する、そのムード面であり、テンス・アスペクト対立もそれによって変容する。このような原理自体は一部の研究ではすでに指摘されていたが、このメカニズムが実際にどのように働くかの実証的な考察はまだなされていなかった。そこで、この章では、これらの動詞が〈確認・記述〉および〈表出〉のムードの意味をベースとしつつどのようなアスペクト・テンス対立を実現しているかを大量の実例に基づいて考察した結果、感情・感覚・知覚といった語彙的な意味の分類を超えて、これらの動詞のムード・テンス・アスペクト体系には5つのバリエーションがあることが明らかになった。

次に取り上げたのは、特性動詞である。特性動詞は、時間的限定性のない恒常的な特徴を表すため、アスペクト・テンス形式は時間的な意味の対立を表しえず、固定化が進んでいる。すなわち、多くの動詞は連体形がシタ、終止形がシテイルであり、概ね、アスペクト・テンス形式は構文論的な機能の区別に対応していることになるが、一方で、アスペクト・テンス形式の再利用も進んでいることが用例調査から明らかになった。終止形では、シテイル形式が中心であるが、一部の動詞にはスル形式の使用も見られる。そして、両形式の使い分けには、テキストタイプと関わって、人・物の特徴を具体的な根拠を通して評価的な判断を行っていることを明示するか否かということが関係していると見られる。また、連体形には、シタ形式のほか、少ないながらシテイル形式も使用され、シタ形式は名詞のさししめす人・物の範囲を〈限定〉する規定語としての機能が中心であるのに対して、シテイル形式は、〈対比関係〉〈主体的なかかわり〉など、対象の捉え方に関わる意味で使われる傾向があり、述語的機能を中心としている。

最後に、空間的配置動詞を取り上げた。これらは、時間的限定性の研究においても、1つのタイ

プとして取り上げられていないため、まず、所属動詞を概観し、意味的・文法的に特徴づけた。次に、空間的配置動詞の代表として「そびえる」を取り上げ、テキストタイプを分類した上で、このタイプの動詞のアスペクト・テンス形式の分布と意味・機能について、実例に基づく調査を行った。その結果、これらの動詞のアスペクト・テンス形式の選択は、テキストタイプと密接に相関し、その意味・機能がテキストタイプとの相互作用の中で実現することが明らかになった。その相互作用のあり方は、非アクチュアルなテキスト（地誌論述文、小説の地の文の解説部分）では客観的な用法（恒常性）が中心となり、アクチュアルなテキスト（紀行文・ルポルタージュ、小説の地の文外的出来事提示部分）では主観的側面（ムード性、文体的効果、視点、タクシスの機能）を前面化させるというように一般化できる。

#### 4. 結論

動詞が〈運動〉という典型的な意味から外れて、〈状態〉〈特性〉〈空間的配置〉などの意味を表すとき、アスペクト・テンス形式は、語彙的な意味の特殊性や構文論的な環境、テキストとの相互作用の結果、そのムード・テンス・アスペクト体系が再構築されたり、人間の認知活動を反映するものへと再利用されたりする。本論文は、運動動詞以外の動詞も含めた総合的な日本語動詞論を展望しつつ、その第一歩となるものである。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、7月11日（火）16時より法学部会議室で開催した。審査委員は、指導教員の宮崎（日本語学）、副指導教員の片桐准教授（言語学）、堤准教授（日本語学）に、予備審査から加わっていただいている栗林教授（言語学）、学外より招聘した工藤眞由美大阪大学名誉教授（日本語学）の5名である。審査論文のアスペクト・テンスに関する研究史観や時間的限定性の研究の方法論について厳格な審査を行うことが学術性の評価には不可欠であり、その方面の研究をリードしてきた日本を代表する研究者である工藤名誉教授にそうした角度からの評価をお願いすることにした。

審査論文の中心テーマである「時間的限定性」とは、言語化される事象を一時的なものから恒常的なものへのスケールの上に捉える概念であり、この観点から、事象は〈運動〉〈状態〉〈特性〉〈関係〉〈質〉などにタイプ化される。従来の言語研究では、〈運動〉を表す動詞文の研究が盛んであったが、最近では、形容詞文や名詞文の研究も進んでいる。それによって、〈運動〉以外の事象のタイプも注目されるようになったが、〈運動〉を表さない動詞は取り残されており、そこに焦点を当てたのが申請者の研究である。動詞のプロトタイプが運動動詞だとすれば、それ以外の非プロトタイプの動詞がかくも大量に存在しているのはなぜかというところに申請者の問題意識がある。

審査論文では、動詞の意味的タイプの非プロトタイプから、まず〈状態〉〈特性〉を取り上げ、特にそれらのアスペクト・テンス形式について考察している。アスペクト・テンス形式は、〈運動〉を

表す動詞のためにあるのであり、〈特性〉などの恒常的な事象を表す動詞にとって、本来それらは不要であるが、動詞の宿命として、〈運動〉を表さずとも、アスペクト・テンス形式の1つを選択して使用しなければならない。その時の選択原理はいかなるものか。また、〈状態〉は〈運動〉に連続するが、静的であること、話し手の内的情態に関わることによって、状態動詞のMTA体系が運動動詞からどのように変容し、そのあり方によって状態動詞はいくつに分類できるか。さらに、従来、〈空間的配置〉は時間的限定性の議論の中では1つのタイプとしては取り上げられていないが、アスペクト・テンス形式の使用法から、それを特徴づけることは可能か。これらを明らかにすることが審査論文の目的である。

以下、審査論文に対する審査会の評価を観点ごとに述べる。まず、審査論文の構想力について。審査論文で特筆すべき点は、問題意識の明確さ、優れた構想力、研究史の中に自らの研究を位置づけ、将来を展望する射程の長さである。こうした研究能力の高さによって、申請者は日本学術振興会第6回育志賞を受賞し、研究者としてその将来性が高く評価された。育志賞のプレゼンテーションでは、審査論文が、申請者が目標とするところの、体系的な日本語動詞論、述語論の第一段階に位置づけられることを説明した。研究史の記述が予備論文から大きく改善されていることも注目される。

審査論文の構成力、記述力、文章力について。これらの能力の高さも、審査委員全員が認める審査論文の特徴である。審査論文の形式的な完成度の高さは、予備審査段階ですでに高く評価されていたが、学位論文ではさらに磨きがかかっている。

審査論文の実証性について。審査論文では、目視での用例収集から始め、日本語書き言葉均衡コーパスや新聞記事データベース、シナリオなどの広範な言語資料から膨大な量の用例を収集・観察し、データベース化を行っている。テキストタイプにも十分に配慮し、考察に使用する用例を慎重に選別している。審査論文には数多くの用例が提示され、1つの事実の指摘に対して複数の用例を挙げるよう心がけている。やむをえず使用した作例はごくわずかである。

審査論文の独創性について。申請者の研究は、空間的配置動詞の「そびえる」から始まった。この研究では、「そびえる」は必ずシテイル形式になるという従来の指摘が事実と反することを証明し、そのアスペクト・テンス形式のテキストにおける分布を記述し、テキストとの相関性を説明することで、時間的限定性の観点から〈空間的配置〉について考察する道を開いた。その独創性が非常に審査の厳しい『日本語の研究』の査読委員会に評価され、投稿論文が採用された。申請者の主張に対して、学外招聘委員からは、タクシスの機能の証明には「そびえてきた」という形式への注目が有効ではないかという示唆があった。

審査論文の内容に関して、審査会で特に議論となった点は、〈空間的配置〉の位置づけについてである。申請者は、これを時間的限定性の観点から見た動詞の意味の1タイプと見ているが、スケールの上に位置づけられるかという問題である。申請者は現時点では位置づけられないと考えているが、それは〈空間的配置〉が〈存在〉と〈関係〉の両面性をもつ特殊な存在であるからなのか、あるいは、〈空間的配置〉は時間的限定性的一种ではなく、〈存在〉や〈関係〉の下位種になるのかといった問題の解決が求められる。また、時間的限定性の観点からの動詞のタイプ化とアスペクト・

テンス形式の使用法との相関性を全面的に追究するならば、すべてのタイプについて同じ基準で観察することが考えられてよい。

課題としては、以下のようなことが指摘された。審査論文では、結論として、状態動詞についてはMTA体系の「再構築」、特性動詞・空間的配置動詞についてはアスペクト・テンス形式の「再利用」という概念を用いて全体のまとめを行っている。このうち「再利用」については、現時点ではいろいろな現象をまとめる用語にすぎないので、何らかの一般化の意図があるなら、さらに説明が必要である。そのほか、審査論文をさらに改善・発展させるための方法として、この研究方法の他言語への適用や統計的手法の導入などが審査委員から提案された。このように、審査論文には、いくつか課題も残されてはいるが、それらは次の段階で達成すべき目標として見えてくるものであって、申請者の現在の研究の価値を減じるものではない。

審査会では、構想力、独創性、構成力、実証性、表現力の基準に照らして、申請論文が学術論文として十分に高い水準にあると評価し、審査委員全員一致で、学位授与にふさわしいという結論に達した。